

抗インフルエンザウイルス薬

<作成: stnv基礎医学研究室>

ノイラミニダーゼ阻害薬

- ・オセルタミビルリン酸塩 <<タミフル、オセルタミビル>>
- ・ラニナビルオクタン酸エステル水和物 <<イナビル>>
- ・ザナミビル水和物 <<リレンザ>>
- ・ペラミビル水和物 <<ラピアクタ>>

キャップ依存性エンドヌクレアーゼ阻害薬

- ・パロキサビルマルボキシル <<ゾフルーザ>>

RNAポリメラーゼ阻害薬

- ・ファビピラビル <<アビガン>>

ウイルス脱殻阻害薬

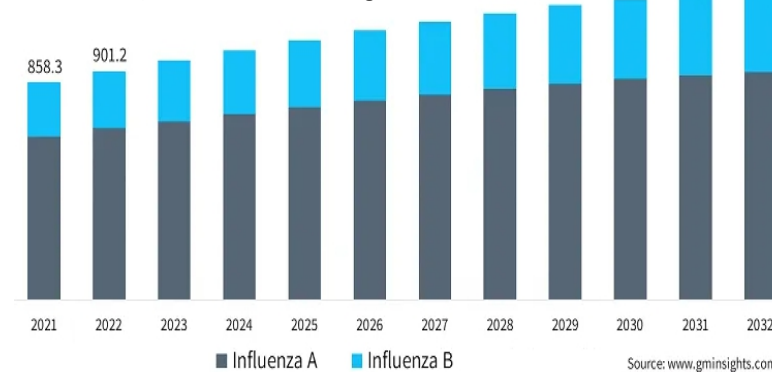
- ・アマンタジン塩酸塩 <<シンメトレル、アマンタジン塩酸塩>>

異常行動や突然死が問題になったタミフルも含め、抗インフルエンザウイルス薬は、今後も着実な売り上げ増が期待されている

インフルエンザ診断に関わる検査キットや機器も、更に大きな売り上げ増が期待されている

Influenza Medications Market, By Influenza Type, 2021 - 2032 (USD Million)

(原図の出典: Global Market Insights)



世界インフルエンザ診断市場の見通し 2025年~2033年 (100万米ドル)

imarc

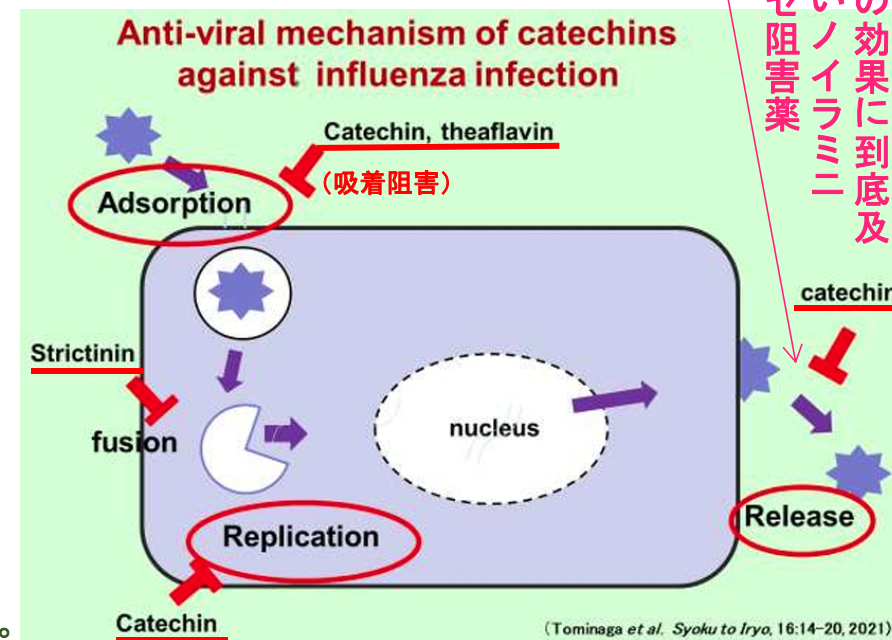


更なる市場拡大のためには、インフルエンザウイルスに、今後も頑張ってもらいたいのが企業側の本音であろう

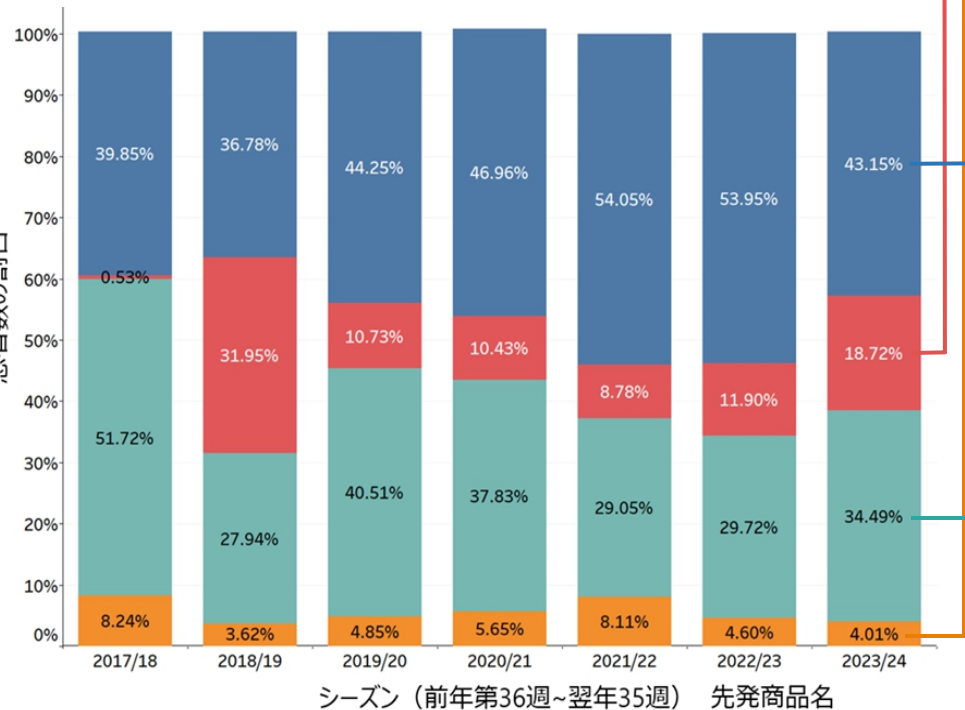
◆最もシェアの大きいノイラミニダーゼ阻害薬は、細胞内にて増殖したインフルエンザウイルスが、細胞外へ出る際に必要としているノイラミニダーゼの働きを阻害することによって、ウイルスが細胞から遊離することを抑える。

◆従って、ウイルスが細胞内で増えてしまってから服用しても効果がないため、発熱などの症状が出てから48時間以内に投与する必要がある。

◆一方、お茶に含まれている各種成分(カテキン、テアフラビン、ストリクチニンなど)は、ウイルスの吸着・侵入、融合、複製、遊離の各段階を抑制するため、抗インフルエンザ薬よりも格段に高い抗インフルエンザウイルス効果が得られる。



お茶の効果に到底及ばないノイラミニダーゼ阻害薬



処方された薬剤の種類の変移

薬剤ごとの患者数の割合

(原図の出典: 株式会社日本医薬総合研究所)

- タミフル
 - ソフルーザ
 - イナビル
 - リレンザ
- 内服
- 吸入